



てらるる



2020年
12月
No.876

■発行所■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■ウェブサイト■ <https://jelc.or.jp/>

■E-mail■ jelc@jelc.or.jp

■発行人■ 李明生 koho@jelc.or.jp

■印刷人■ 精文堂印刷株式会社

■定価■ 1部40円(郵税を含む)

■振替口座■ 00190-7-1734

説教「キリストが語る」

日本福音ルーテル日吉教会牧師 多田 哲

「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。」(ヨハネによる福音書1:14a)

言葉があまりに力なく
思える時があります。言
葉を口に出したその瞬間
から空中に霧散していく
ような、あるいは、言葉
が誰かの中に届くことな
く世界の表面を滑り落ち
ていくような、そんな感
覚があります。どれほど
言葉が尽くしても空虚さ
が募っていくと感ずるこ
とがあります。いえ、言
葉を尽くすことさえ、も
はやできていないのかも
しれません。現代では、
この世界の多くの言説に
ついて、考えたり、判断
したり、掘り下げたりす
ることが避けられる傾向
があるように思います。

その原因の一つは加速す
る時代の変化かもしれま
せん。情報化、グローバ
ル化された現代社会で
は、あまりに多くの情報
が私たちの目に届きま
す。世界中の動きが時々
刻々と伝わってきます。
私たちの世界は、ある意
味で、あまりにも拡大さ
れてしまっています。そ
の中では、一つ一つの情
報を精査する余裕があ
りません。入ってくる情
報をとりあえず処理して
いくこととなります。そ
こで重宝されるのが、印
象、単純さ、わかりやす
さです。私たちは、日々、
あまりに多くの情報を
処理していく中で、いつ
しか、複雑で、わかりに
くい、掘り下げた議論な
どを、もう受け付けにく
くなってきているので
す。そうなるにつれて、
言葉は見た目だけどんど
ん派手になり、中身は置
いてけぼりになります。
言葉は重みを失い、言葉
がとも空虚なものに
なってしまうのです。現
代においては、言葉、言説
語りというものが命を
失っているようです。そ
のような世界の中で、私
たちは神の言葉さえも氾
濫する空虚な言葉に埋も
れて見失っているのでは
ないでしょうか。

フランスの哲学者ミ
シェル・アンリは著書『キ
リストの言葉』の中で「今
日、〈神の言葉〉は単に
理解されないままである
ばかりか、〈神の言葉〉
なるものがありうるとい
うことすら考え及ばなく
なっている。」現代社会
の絶え間ない喧騒こそ
が、そこから〈神の言葉〉
が語り出される沈黙の領
域を永久に覆い尽くして

しまったのである。わ
れわれにはもう〈神の
言葉〉が聞こえないの
だ」と述べています。こ
の本の邦題は『キリス
トの言葉』となっていま
すが、フランス語の原題
は『Paroles du Christ』、
『キリストの語り』とも訳せ
ます。フランス語の聖書
ではヨハネによる福音書
1章1節の「初めに言が
あつた」ところが『Au
commencement etait la
Parole』と書かれていま
すので、神の言葉はキリ
ストの語りだと言うこと
ができます。私たちが神
の言葉を世界にあふれる
情報の一つとして処理し
てしまいうちに、それが
キリストの語りであるこ
とを忘れてしまっていま
す。語りには、語ってい
る生きた主体があり、息
遣いがあり、思いが込め
られています。その語
りを聴くには静かに耳を
傾ける時間と場所が必要
です。語りは語られる客
体ではなく、それを聴い
て受け取る者の〈生〉に



到来するのです。
「言は肉となつて、わ
たしたちの間に宿られ
た」とは、どういうこと
なのでしょう。どのよう
にして言が肉になるので
しょう。この聖句を聴い
て私たちは戸惑います。
しかし、この戸惑いが私
たちにとって大事なので
す。神の言葉は、私たち
が情報処理する対象とし
てではなく、語りの主体
としてのキリストが私た
ちの〈生〉に迫ってくる
のです。私たちは神の言
葉の主体ではないので
す。神の言葉は客体とし
て私たちの外にあるので
はなく、私たちが生かす
命として私たちの内にあ
り、常に私たちに語りか
けます。人の口から出る
言葉は無力だとしても、
内なる神の言葉は私たち
の〈生〉を揺さぶります。
そして、どんなに私たち
が世界に絶望しようと
も、神の言葉はキリスト
が主体であるがゆえに、
私たちに語り続けます。
キリストの語りが肉と
なつて私たちの内に宿ら
れたのですから、もはや
私たちの〈生〉はキリス
トと共にあります。その
ことに信頼して、言葉の
氾濫に埋もれてしまうこ
とのないよう、神の言
葉に耳を傾けましょう。

⑨「伝える」

「言の内に命があつた。命は人
間を照らす光であつた。」
(ヨハネによる福音書1:4)



伊藤奈奈

「あかきたな」「あいう
えお」ベッドや車椅子に仰向
けのその人の目を見ながらへ
ルパーさんが言葉を読まれま
す。何だかわかりますか？病
気で体から音による言葉を発
声することが難しくなられた
方との会話です。隣で音を
選りかき話をします。隣で音を
言つと長い瞬きをして違つと
言います。いろんな言葉を見
てきたような気がします。手
話もそのつだと思ひます。音
も無く口を動かしてしゃべる
方。携帯電話のメールでしゃ
べる方。きつとまたまた大き
く合つことのように思います。

んの方法が私たちには与えら
れていません。そういう言葉
を機械に打ち込んで、その機
械がしゃべるといふ方もおら
れます。筆談の方も。神様
であるイエス様も同じです。
「私はいつもあなたと共にい
るよ。」とつた言伝えたいのに
そのお姿さえも見えませんが
私も筆談を必要とされる方た
ちに「字を書けません」と何
度お伝えしようとしても耳が
ご不自由な方たちだったので
言語では聞かれないよう私
に何度もペンを持たせました。
一人の方は時間が許されたの
でPCで文字を打つて伝えま
した。伝えたい、できない、伝
わらない。思いや言葉はどち
らか一方が努力しなくてはな
らないのではなく、伝える
側も伝えられる側も両方の静
かな時間が必要なのかもしれ
ません。いろいろな方法で伝
えようとするそれを聴こうと
することは相手と静かに向き
合つことのように思います。

日本福音ルーテル教会の 出版物をご活用下さい

10月号でお知らせの通り、日本福音ルーテル
教会がこれまでに作成してきた出版物の在庫確認
を行い、頒価を改定いたしました。是非各教会で
ご活用下さい。在庫問い合わせ・お申し込みは事
務局までお願いいたします。

(送料のご負担を別途お願いいたします。また
お届けまでに2週間ほ
ど頂きます。予めご了
承ください。)



お問合せ・お申込み
メール：soumu08@jelc.or.jp FAX：03-3260-8641



議長室から 大柴 謙治

「キリストの降誕」と終わりの日の「キリストの再臨」という二つの「時」の間を生きています。方位を示す磁石が地球の地磁気に対応して北を指してピタツと止まるように、「神のかたち」に造られた私

「魂の志向性」アドヴェント黙想

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」(マタイによる福音書2・10) 今年もアドヴェントに入り教会暦は新しい1年が始まりました。私たちは今ここで2千年前の

は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです(『告白』、山田晶訳)。私たちの魂は神への志向性を持っているのです。ルカ福音書が記すマリアの讃歌もシメオンの讃歌もその道を整え、その道をまっすぐにせよ」という「荒野の声」から始まります。『荒野の40年』であるこの人生では進むべき方向が見失われてしまうこともある。東からの博士がベツレヘムの星を目印に夜の旅を続けたように、私たちもキリストの光を目指してこの世の巡礼の旅を続けてゆきます。光は闇の中に輝いています。しかし頼り星の光ですから、昼間は見えませんし雨や曇りの夜も見えませんが、闇で星の方向と足下の地面の両方を確認しながらの時間のかかる手探り旅。私たちが携えるべき黄金、乳香、没薬とは何か。それは私たちがこれまでそれぞれに大切にしてきた宝物です。一説にはそれは博士たちが用いた占星術の道具だったとも言われます。とすれば博士たちは自分たちの古い生き方をすべて幼子に託したということになる。彼らはそこで喜びにあふれる新しい人生を発見したので(マタイ2・10)。

きに応じて集うことを確認しました。それは、この日の礼拝だけにとどまらず、「洗礼への招き」が内在すること、つまり礼拝が、神様の確かな救いのしるしである聖礼典(洗礼と聖餐)の出来事だということを示すのです。そして、それをもたらすのが「みことば」です。水やパン・ぶどう酒という物素そのものではなく、それが主の「みことば」と共にあることによつて起こります(小教理問答「エンキリディオンの」の洗礼と聖餐の箇所参照)。そのために、神様は私たちを招いてくださるのです。ですから、「招き」に続いて、この礼拝において「みことば」が告げられ、私たちはそれを聴くのです。そこでは、主に教会暦に従った聖書朗読日課による聖書の言葉とその解き明かしの説教を通して「みことば」福音を聴きます。それが究極的には上記の意味で「救いのしるし」、それをもたらし、行う神様の御業そのものとして、私たちは受け止めるのです。現在、COVID-19感染症下の対応で、礼拝は再開したものの「聖餐式」は自粛を余儀なくされている教会もあることでしよう。これまで当たり前前と思つていたことが、まさに得難い貴重な「恵み」であることを、改めて痛感させられています。礼拝に自由に集えない、自由に賛美できず、聖餐に与れないことに後ろめたさや不満、特に聖餐式がないことに、ある種、これで礼拝かと疑問をお持ちの方もあるかもしれません。しかし、パンとぶどう酒の聖餐に現状では与れない状況があつたとしても、神の救いの出来事を指し示し行うのは「みことば」であること、このような状況であるからこそ、改めて強く「みことば」に聴くという礼拝を大切にしたいのです。集えない現状でも、各教会でそれぞれの取り組みがなされ、「みことば」に触れる手立てを講じています。確かに「共に一つ所に集う」という形はとれなくても、「みことば」を聴き、その「みことば」を通して聖霊が働き、それぞれの場で、私たちは「一つとされていく」ことを信じましょう。

「教会讃美歌 増補」解説

⑥ 讃美歌委員からの声(1)

讃美歌委員会 松本義宣 (東京教会牧師)

委員長から5回にわたりに紹介された「増補」版作成の末席に加えられ、作業に携わりました。讃美歌に関わること、訳詞をはじめ「歌」を作るという作業は初めてで、戸惑いや試行錯誤ばかりでしたが、改めて先達が歌い継ぎ、育んで来た賛美歌

や歌集の大切さや重要性に思いをはせる得難い体験でした。これまでには深く考えもせずに、好き嫌いや易しい難しいといった範疇でしかとらえて来ませんでした。改めて教会で、礼拝で、私たちが共に歌うこと、そこで告げられる「信仰の言葉」、聖書から、作者の信仰や経験から紡ぎ出され、それを共有し、さらに隣人に届けていく、その讃美歌の意味と意義、何より喜びと素晴らしさを痛感しています。収録歌の紹介はいずれこの欄です。しかし今回はやはり、この新型ウイルス感染症下の

の「賛美歌」について考えたのです。「共に声を合わせ歌うこと」これが感染リスクの面で避けねばならぬことだというのはなんと辛いことか。改めて歌うことの恵みが特別なことだと痛感します。多くの教会でやつと再開された礼拝ですが、「賛美歌は歌わないう」ように、あるいはマスクの下で口ずさむ程度でといった状況でしょう。しかし「歌のない、歌えない賛美歌」のこの状況が、かえって賛美歌の本質を私たちに教えるチャンスになったのです。それは歌詞である「ことば」に集中することです。これまで賛美歌

私たちの礼拝 式文ハンドブック

⑤ 招かれ「みことば」を聴く

松本義宣 (東京教会牧師)

「招かれ」であり、私たち自らの意志ではなく、神様の招きに応じて集うことを確認しました。それは、この日の礼拝だけにとどまらず、「洗礼への招き」が内在すること、つまり礼拝が、神様の確かな救いのしるしである聖礼典(洗礼と聖餐)の出来事だということを示すのです。そして、それをもたらすのが「みことば」です。水やパン・ぶどう酒という物素そのものではなく、それが主の「みことば」と共にあることによつて起こります(小教理問答「エンキリディオンの」の洗礼と聖餐の箇所参照)。そのために、神様は私たちを招いてくださるのです。ですから、「招き」に続いて、この礼拝において「みことば」が告げられ、私たちはそれを聴くのです。そこでは、主に教会暦に従った聖書朗読日課による聖書の言葉とその解き明かしの説教を通して「みことば」福音を聴きます。それが究極的には上記の意味で「救いのしるし」、それをもたらし、行う神様の御業そのものとして、私たちは受け止めるのです。現在、COVID-19感染症下の対応で、礼拝は再開したものの「聖餐式」は自粛を余儀なくされている教会もあることでしよう。これまで当たり前前と思つていたことが、まさに得難い貴重な「恵み」であることを、改めて痛感させられています。礼拝に自由に集えない、自由に賛美できず、聖餐に与れないことに後ろめたさや不満、特に聖餐式がないことに、ある種、これで礼拝かと疑問をお持ちの方もあるかもしれません。しかし、パンとぶどう酒の聖餐に現状では与れない状況があつたとしても、神の救いの出来事を指し示し行うのは「みことば」であること、このような状況であるからこそ、改めて強く「みことば」に聴くという礼拝を大切にしたいのです。集えない現状でも、各教会でそれぞれの取り組みがなされ、「みことば」に触れる手立てを講じています。確かに「共に一つ所に集う」という形はとれなくても、「みことば」を聴き、その「みことば」を通して聖霊が働き、それぞれの場で、私たちは「一つとされていく」ことを信じましょう。





社会福祉法人

千葉ベタニヤホーム

理事・法人施設長会長 川口 学
（国府台母子ホーム施設長 市川教宏）

2021年に事業創設90周年を迎える千葉ベタニヤホームです。現在旭ヶ丘母子ホーム、旭ヶ丘保育園、児童家庭支援センター・旭ヶ丘（千

方法、③緊急事態宣言下等における職員の勤務④虐待が懸念される家庭への切れ目の無い関わり、⑤新しい生活様式を踏まえた支援・保育・家庭訪問相談のあり方、⑥5段階程度の各ステージ（地域の感染状況）に応じた行動基準やガイドラインの策定、⑦コロナ禍における法人総合防災訓練の計画化等と内容は多岐にわたります。全施設で同様に対応することもありません。また、他施設の工夫を自施設に持ち帰り、職員間で検討し実践に活かしていくこと

もありました。チャプレンの市川教会の中島康文先生は「いつもと違う…」という考えはやめて、「今年はどうのようにして迎えようか」という発想をお示し下さいます。国府台母子ホームでは、数回に分ける礼拝スタイル、祝会の内容お弁当のメニュー決め等楽しんで準備をしています。でも、いつもと違うなことがあります。ホームクリスマスのテーマは昨年と同じです。You are Loved 早いもので今年もクリスマスを迎える季節となりました。

社会福祉法人

あゆみの家

総合施設長 田口道治
（大垣教会）

「あなたの慈しみは大きく、天に満ち／あなたのまことは大きく、雲を覆います。」（詩編57・11）

あゆみの家は日本のほぼ中央部、濃尾平野の西北端に位置しています。施設や事業所（※）は、岐阜県大垣市や垂井町、養老町に点在し、障がいのある人たちの生活支援や日中活動就労支援、地域生活支

援に取り組んでいます。来年は創立50周年を迎えます。本年（2020）2月に岐阜県内で最初の新型コロナウイルス感染症の発生が、あゆみの家の施設・各事業所でもマスクの着用、手指消毒など標準予防策の励行、3密の回避など感染防止のための様々な取組をしてきました。また、入所施設やグループホームにおける集団感染の発生に備えて、法人全体での職員の応援体制整備も検討し、これまでにあゆみの家独自の「対応マニユ

アル」や月毎に異なる「感染防止対策確認一覧表」などを作成して皆で意思統一を図りながら取り組んでいます。支援の現場では、重度の知的障がいなど支援を必要とされる方々の障がい特性により、マスク着用が難しかったり、食事や衣服の着脱、入浴の介助等、日常生活での密接支援は不可欠で3密の回避が困難な現実があります。外出の自粛など従来の活動や行動範囲が大きく制約、制限され、不自由で窮屈な生活が続いて8カ月以上が経ちますが、こうした中に

「元の記事のURL」
<https://www.lutheranworld.org/news/covid-19-new-awareness-social-cohesion-growing-crisis>
「なぜこれほどまでとは思わなかったのですか？」
「過去数十年は、個人主義が極端なまでに進んでしまっていたからです。個人の自由、それは裏返せば社会的意識の欠如なんです。これが善の終着点のように見えていました。ところが今回の危機によって新たな気づきがあり、隣人と共に生きていくために為すべき自分の使命に気づくようになっていきます。こうした態度がこれまで以上に必要となつていきます。」

「これ以上悪くならないようにするにはどうしたらよいか」といふときに、そこまで考えるのは行き過ぎといえませんか？
「今がそのときです。これほどまでに問題意識が高まったことは、かつてないのです。ドイツの自動車業界は、この危機に直面して移動と輸送のあり方を根本的に考え直しています。肉食産業は、コロナ禍で肉製品の摂り過ぎが改めて取り立たされるなか、生物、人間、環境を犠牲にしてまで消費を優先することを問題にしています。この二つは、今ドイツで懸案になつてい

世界の教会の声

浅野直樹 Sr.
（世界宣教師市ヶ谷・スオミ教会牧師）

世界ルーテル連盟(LWF)がドイツ・ハノーファーのラルフ・マイスター監督にインタビューした記事(2020年8月7日)の紹介の続きです。



ラルフ・マイスター監督 (写真はLWFサイトから)

「パンデミックは多くの深刻な問いを投げかけました。これは直面している状況をよめるかに超えて、人間社会の体系そのものに対する問いでもありません。たとえば経済です。コロナ禍によって経済が今後どうなっていくのか、まだ先が見えません。政治面と財政面での大規模な介入は急務的には有効で、それによって社

会全体が崩壊しないよう食い止めています。同時に問わねばならないのは、現存する数多くの長期的かつ根本的な課題です。今のやり方を今後も続けるのかどうかです。たとえば輸送、エネルギー、サプライチェーンなどの産業が持続可能なスタイルに形を変えていくようにもつと働きかけるべきか、すべきでないか。」
「これ以上悪くならないようにするにはどうしたらよいか」といふときに、そこまで考えるのは行き過ぎといえませんか？
「今がそのときです。これほどまでに問題意識が高まったことは、かつてないのです。ドイツの自動車業界は、この危機に直面して移動と輸送のあり方を根本的に考え直しています。肉食産業は、コロナ禍で肉製品の摂り過ぎが改めて取り立たされるなか、生物、人間、環境を犠牲にしてまで消費を優先することを問題にしています。この二つは、今ドイツで懸案になつてい

【報告とお詫】

既にお伝えしております通り、機関紙『あゆみの家』2020年10月号一面説教における「依存症に関する記述について、編集部ならびに教会事務局において調査と協議を行いました。執筆者と読者層との文化的・社会的文脈の相違についての必要な配慮と対応を編集部が前もって行わなかったために、翻訳ならびに構成の吟味が不十分となり、執筆者の意図しない形で読者を傷つける表現となつてしまったことを確認いたしました。依存症当事者の方々ならびに支援者の方々に傷つけてしまったことを心よりお詫び申し上げます。
なお当該記事に関しては改訂版を作成し、インターネットサイト上にて再公開いたします。また今後の再発を防止するために、機関紙編集に際しての必要な対応について再確認をいたしました。以上、謹んで報告いたします。

2020年度日本ルーテル神学校オープンセミナー

河田優（ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校チャプレン）

日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教会、日本ルーテル神学校共催の「神学校オープンセミナー」、本年度は新型コロナウイルスの影響もあり、同時双方向通信のZoomを用いて行われました。初めての試みであり準備の段階から不安もありましたが、結果、北海道から九州まで10名（内JELCからの参加者8名）の参加があり、昨年度を超えるものでした。イン

ターネットを用いた効果と云えるでしょう。

第1部は開会礼拝から始まり、



立山神学校校長からの挨拶

オープンセミナーに参加して

東静（保命教区）

オンラインでのオープンセミナー。私は初めて参加することができた。私自身が参加したきっかけは、神学を学ぶことに興味があったからだ。神学校で学ぶという決意には至っていなかった。しかしそんな私でも参加することが許された。非常に嬉しかった。また、例年通り神学校での開催では、0歳の娘がいる為参加できなかった。今年、今年度の開催がオンラインであったからこそ、参加の一步を踏み出すことができた。

「シンガクつて難しそう」と考えていた私でも神学の世界を少し覗いた気分になりとても嬉しかった。もっと深く学んでみたいと思われた。また、質問コーナーも設けて下さり、神学校についての質問から献身のきっかけについてまで、幅広く神学生の皆さん、現在牧師として働かれている先生方にもお答え頂き、貴重な機会となった。

「コロナ禍だから」今年度は直接顔を合わせる事ができずオンラインでの開催だったが、しかし「コロナ禍だからこそ」、文頭でもお話ししたとおり幼い娘がいなくても参加できた。

また、遠く離れていても、パソコンの画面上でも献身の志がある参加者の皆さん、先生方と顔を合わせることで、一つのところで祈り、礼拝しているような気分になった。場所は関係なく、ともに祈り礼拝することが可能であることを再確認できた。礼拝や講義、アイズブレイク等内容も盛りだくさんで、長丁場ではあったが、あつという間に感じた。特に大串先生の講義では、わかりやすくお話し頂き、是非参加したい。

「コロナとまことの礼拝」秋のルター・セミナー「報告」

江口再起（ルター研究所長）

2020年はコロナの年、世界史に特筆すべき年となった。世界も個人の生活も、そして教会も激変を味わった。それを

「礼拝」への問いである。日本福音ルーテル教会では、3月26日に大柴譲治議長の話が発表され、「すべての命を守る観点から、「礼拝など」状況に柔軟に対処しよう」ということになった。従来どおりの対面礼拝ができなければ、オンライン礼拝や文書礼拝のすゝめである。この方針を立てる。ルターの著作（大教理問答書、「ガラテア大講解」、「会衆の礼拝式について」など）を通して丁寧に検討。もちろん聖餐式の問題についても深く検討。しかし更に、歩みを一歩ずつ、ルターにさかのぼるだけでなく、まず何よりも「聖書」に目を澄ますことの大切さを強調した。

礼拝とは何か。そこで指摘されたのが、ヨハネ福音書4章に記されているイエスとサマリアの女の問答である。そこでイエスは「まことの礼拝」ということを語っている。「まことの礼拝をする者たち、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」（4章23節）。礼拝とは何か。「まことの礼拝」とは何か。ぜひ、聖書を開いてその箇所を読んでいただきたい。



↑大串肇先生による講義



↑三浦知夫神学教育委員長による開会礼拝

加者は「神学と共に聖書を読む」体験ができたこと、でしょう。

神学生を中心に進められた第2部には2人の若手牧師も加わり、互いの思いを分かち合う恵まれた時間となりました。閉会礼拝で神学生が証しを行い、本年度のオープンセミナーは終了しました。来年度以降も継続してオープンセミナーが開催されます。教会の将来を支える催しです。これから皆様と共に祈りを合わせ、献身へと導かれる者たちの神学校、そして牧師への道を整えていき

参加する前は緊張していたが、プログラムのおかげで自己紹介やアイズブレイクを行って下さり、リラックスして参加することができた。参加者の皆さんのことも知ることができた。礼拝や講義、アイズブレイク等内容も盛りだくさんで、長丁場ではあったが、あつという間に感じた。特に大串先生の講義では、わかりやすくお話し頂き、是非参加したい。

また、遠く離れていても、パソコンの画面上でも献身の志がある参加者の皆さん、先生方と顔を合わせることで、一つのところで祈り、礼拝しているような気分になった。場所は関係なく、ともに祈り礼拝することが可能であることを再確認できた。礼拝や講義、アイズブレイク等内容も盛りだくさんで、長丁場ではあったが、あつという間に感じた。特に大串先生の講義では、わかりやすくお話し頂き、是非参加したい。

立山神学校は次のように発題した。たとえ治療薬やワクチンができて、世界はパンデミック以前には戻らないのではない。教会もその例外ではない。そこで「まことの礼拝」ということを語っている。「まことの礼拝をする者たち、霊と真理



ルターセミナー・オンライン参加の様子